『チャンス』における女家庭教師像に関する一考察

——ヴィクトリア朝文化の枠組の中で考える——

松　方　由美子

ジョウゼフ・コンラッド（Joseph Conrad, 1857–1924）は後期小説『チャンス』（*Chance*, 1912）において，女主人公フローラ（Flora de Barral）の家庭教師を務める一人の女性を登場させている。この「女家庭教師」（governess）はフローラの父が破産すると，突然悪態をつきド・バラル邸を出て行く。彼女はいわゆるヒロインを傷つける悪役として設定され，その人物造型は一読した所深みもなく，E・M・フォースターの言う扁平人物（flat character）としての印象しか残らないだろう[1]。女性描写に関してコンラッドはこれまで女性を余り描かない，あるいは充分に描けないミソジニストの〈男性的な〉作家としばしば言われてきた[2]。『チャンス』におけるガヴァネス像は，そのような説を支持する好例のように見える。なぜなら，彼女は教え子フローラの心を傷つける残酷な人物としてのみ描かれ，一見した所，人間としての複雑さも見えず，作者の共感も感じられないからである。

コンラッドは『チャンス』において初めてガヴァネスという職業の女性を描いているが，なぜフローラのガヴァネスを残酷で人間性の歪んだ悪役として呈示したのだろうか。作者の女性嫌いの表われなのだろうか，それとも創作力の衰えの兆候なのだろうか。ここで考えなければならないのは，ガヴァネスとは住み込みの女家庭教師であり，ヴィクトリア朝の小説

では一つの道具立てとして良く使われたが，ヴィクトリア朝初期にはおよそ25,000人のガヴァネスが存在したのであり[3]，このような女性達が置かれていた現実の状況を抜きにしては，フローラのガヴァネスの人物像も充分に理解できないということである。彼女はマイナーな人物としてこれまでの研究では殆ど取り上げられることはなかったが[4]，本論では，ヴィクトリア朝におけるガヴァネスという社会・文化的コンテクストの中で捉えることによって[5]，その人物像の深層に迫り，コンラッドの女性描写の問題に新たな光を照射したい。

I

『チャンス』において名前を与えられていないフローラのガヴァネスが[6]，完全な悪役として扁平人物の印象を現代の読者が受けるのは，彼女が作品前半部のみに登場し，ヒロインの心を傷つけるという主要な役割を演じた後，舞台から消えてしまう為であろう。しかもこの場面において彼女は非常に残酷な人物として描かれているので，悪役としての印象が強く残るのだが，その人物像を解く鍵となると思われるので，まずこの場面を詳しく見てみよう。

フローラの父であるド・バラル氏は敏腕の金融家であり，ロンドンで仕事に没頭する間，ヴィクトリア朝の多くの中・上流の家庭がそうであったように，ブライトンの大邸宅にガヴァネスと多くの召し使いをつけ，妻と娘を住まわせていた。フローラのガヴァネスはここで一人娘フローラの家庭教師を務めていたのだが，放漫な経営の内にド・バラル氏が破産すると，突然手の平を返したような態度で教え子を罵り，屋敷を出て行くのである。ド・バラル氏破産のニュースを知り，異様な形相でフローラの部屋に入って来たガヴァネスは，以下のように描かれている。

> 'What are you screaming for, you little fool?' she said advancing alone close to the girl who was affected exactly *as*

if she had seen Medusa's head with serpentine locks set mysteriously on the shoulders of that familiar person, in that brown dress, under that hat she knew so well. It made her lose all her hold on reality. (118 斜体筆者)

フローラの回想によると，ここでガヴァネスは彼女に向かって何度も“little fool”と呼び，金以外に知的な人間から関心を引き出せるかと問いつめ，心情，頭脳，外見において全くつまらない人間だと断言している(119)。母を失い，父ともたまにしか会えないフローラにとって，最も身近な母親代わりとも言うべきガヴァネスから言われたこれらの言葉は，寝こむ程のショックを与え，この経験は後の夫アンソニー（Roderick Anthony）との関係にも影響を及ぼすトラウマとなるのである。そしてここで注意したいのは，ガヴァネスの怒りに満ちた顔が，ギリシア神話の中のメデューサ――彼女の顔を見た者を石に変えると言われる――に喩えられているということである。この場面におけるガヴァネスの描写には作者の共感は全く感じられず，女性の「狂気」という19世紀の神話を増殖しているようにさえ見えるのである。

いかなる職業であれ，雇い主が破産したとなれば，そこを出て行くのは雇われていた者としては当然のことではある。しかしながら，教え子に対し人格を傷つける程の侮辱の言葉を浴びせ出て行くというフローラのガヴァネスの行動は，一種異様の感があり，現代の読者の理解を越えるものがある。雇い主の破産という表面上の理由以外に隠された原因があることを，ガヴァネスの狂気じみた怒りの描写は暗示しているように思われる。語り手マーロウの以下の言葉は，この点について一つの手がかりを与えてくれる。

She [Flora] stood, a frail and passive vessel into which the other [the governess] went on pouring *all* the accumulated

> dislike for *all* her pupils, her scorn of *all* her employers (the ducal one included), the accumulated resentment, the infinite hatred of all these unrelieved years of —— I won't say hypocrisy. (119 斜体筆者)

フローラのガヴァネスは教え子に向かって激しい罵りの言葉を吐き出すようにぶつけたのだが，ここで注意したいのは，繰り返される“all”という語である。このガヴァネスはド・バラル家で勤める前にいくつかの家庭で勤めたことがあったが，彼女の激しい言葉はフローラに向かって投げつけられながらも，実はこれまで雇われた全ての雇用者とその子供達に向けられたものであったのである。つまり彼女の怒りは，雇用者の破産という今回の事件だけに原因があるのではなく，ガヴァネスという職業に長年携わったことから生じたものであり，積年の怒りが爆発した形で表われた，根の深いものであることが推察されるのである。

ガヴァネスとは女性による女子教育であり，未来の女性を育てるという仕事はやりがいのある仕事であるように思われるが，フローラのガヴァネスの雇用者とその子供達に対する激しい憤りの念は，なぜ起こったのだろうか。それは彼女自身に問題があったのだろうか，それともガヴァネスという職業そのものに潜在する，もっと現実的で一般的な問題が存在したのだろうか。ド・バラル家を去ったガヴァネスの心中を，マーロウは次のように洞察している。

> No! I will say the years, the passionate, bitter years, of restraint, the iron, admirably mannered restraint at every moment, in a never-failing correctness of speech, glances, movements, smiles, gestures, establishing for her a high reputation, an impressive record of success in her sphere. It had been *like living half strangled for years.* (120 斜体筆者)

19世紀後半いわゆる〈余った女〉が大量に出現した為に[7]，需要より供給がはるかに上回るガヴァネスの市場において，この職につくことは大変困難なことであったが[8]，そのような中でフローラのガヴァネスはこの職につき，彼女なりにうまくやってきた。だがここで注意したいのは，マーロウはガヴァネスの仕事を「抑制」を要する仕事であり，「半分窒息しながら生きているよう」だと喩えていることである。マーロウがこのように言っているのは，ガヴァネスが英語，フランス語，音楽，絵画といった科目を教えながらも，その教育の目標がキリスト教のレディとしての道徳的模範を示すことであったからである[9]。しかも住み込みであったから，言わば無休で教師として手本を示さなければならず，ガヴァネスは常に緊張状態にあったのである[10]。引用部最後のマーロウの比喩は，ヴィクトリア朝のガヴァネスが置かれていた苦境を正確に伝えているが，フローラのガヴァネスもこのような状況の中で苦しんでいたのである。

ガヴァネスという仕事そのものから生まれる苦境はいくつか挙げられるが，中でもその仕事を辛いものにしていた大きな要因の一つとして，社会的地位の曖昧さが挙げられる。つまりガヴァネスとはレディによるレディの教育である為，雇用者と雇われる者が対等の身分であったのである[11]。レディの教育はレディしかできないからである。しかしながら，ヴィクトリア朝のレディの理念から言えば，生活の為に家庭の外で働くことはレディとは見なされない。ガヴァネスは父親の病気や死，失業，事業の失敗などの理由で働くことを余儀なくされた女性達であるが，このような矛盾を孕んだ立場にあった為，教師としての権威は確固としたものではなく，雇用者だけでなく他の召し使いや子供達との間にも，様々な気まずい場面を生み出したようである[12]。フローラのガヴァネスもこのような階級にまつわる矛盾を日々の仕事の中で感じていたことが，ド・バレル家を去る前の彼女自身の言葉の中に表われている。

'He's nothing but a thief,' she cried, 'this father of yours. As to

you I have never been deceived in you for a moment. I have been growing more and more sick of you for years. *You are a vulgar, silly nonentity*, and you shall go back to where you belong, whatever low place you have sprung from, and beg your bread —— that is if anybody's charity will have anything to do with you, which I doubt ——' (122 斜体筆者)

ここで注目に値するのは，フローラのガヴァネスが雇用者の娘に対し，たとえその父が破産したとしても，"vulgar," "low place" といった相手を見下す言葉を使っていることである。このことは，ド・バラル氏が金融の仕事で成功し巨額の富を築き，大邸宅に多くの召し使いと家庭教師をつけて豊かな暮らしをしていても，所詮は新興成金であり，家柄の良さを示すものではないからであろう。これに対しフローラのガヴァネスは，貴族の出身だと公言していた (73) から，もしこの言葉が本当だとすれば，雇用者よりも雇われる者の方が階級が上ということになる。雇用者の破産という事件が，フローラのガヴァネスに今まで感じてはいたが口にはしなかった，言わば本音を出させることになったのである。一見理解に苦しむ彼女の無礼な言動も，ガヴァネスという職業そのものに内在する矛盾を写し出していると言えるのである。

II

フローラのガヴァネスの一時的な感情の爆発は，ガヴァネスという仕事そのものの内容や置かれた立場から，ある程度は説明できる。しかしながら，彼女がしていることは実はこれだけではない。フローラのガヴァネスはフローラを罵った後，ド・バラル氏の財産を全て銀行から引き出し，甥と称する青年と逃げているのである。彼女はなぜこのようなことまでしたのだろうか，あるいはしなければならなかったのだろうか。フローラのガヴァネスの行動を理解する為には，ガヴァネスという仕事の内容を知るだ

けでなく，更にヴィクトリア朝の文化的コンテクストの中で考える必要があるように思われる。

『チャンス』におけるマーロウの語りについては，批判的な研究者もいるが[13]，フローラのガヴァネスに関するコメントは適切で洞察に富み，読者を一つの方向に導いてくれる。マーロウはド・バラル家を去った彼女について，その内面にまで入った描写を以下のようにしている。

> She had seen her youth vanish, her freshness disappear, her hopes die, and now she felt her flaming middle-age slipping away from her. No wonder that with her admirably dressed, abundant hair, thickly sprinkled with white threads and adding to her elegant aspect the piquant distinction of a powdered coiffure —— no wonder, I say, that she clung desperately to her last infatuation for that graceless young scamp, even to the extent of hatching for him that amazing plot. (104)

引用部前半においてマーロウは，フローラのガヴァネスの女性としての焦りを描き出しているが，彼女はその結果一つの「陰謀」を企むことになる。その陰謀とは，既に前の場面で隣家に住むファイン夫人（Mrs. Fyne）によってほのめかされているように（90），フローラを実は自分の情夫である青年と結婚させることによって，その莫大な財産を手に入れようとすることであった。なぜ彼女は自らの色香が失せていくことにこれ程まで焦りを感じ，恐ろしい陰謀を企むようになったのだろうか。

その答えの一つは，ヴィクトリア朝文化の女性観に大きく帰せられるように思われる。有名なコヴェントリー・パットモアの詩 “The Angel in the House”（1854-62）に代表されるように，ヴィクトリア朝時代に女性に求められた理想像は，競争の激しい外の社会からの避難場所としての家

庭を守る「家庭の天使」となることであった。ヴィクトリア朝時代は，桂冠詩人テニスンの詩や批評家ラスキンの『胡麻と百合』(*Sesami and Lilies,* 1865) に見られるように[14]，男性は外の世界で戦い，女性は家庭を守り男性を待つという，男女の二分化された見方に基づく文化的ステレオタイプが支配していた。ロンドンの町には売春宿が氾濫し，性のダブル・スタンダードが支配する中で[15]，女性を清純で「性欲のない」[16]，資本主義社会を倫理的に浄化する存在と見なすヴィクトリア文化のイデオロギーは[17]，科学者達の偏見と不十分な実験データによって，科学の方からも強化されたのである[18]。このような中で，「女らしさ」とは結婚して子供を生むことであり，結婚と母性という女性としての役割を満たすことのできない女性は，軽蔑と憐れみの念で見られたという[19]。この為ヴィクトリア朝において，35歳で結婚できない女性は人生の敗北者と見なされた[20]。特にガヴァネスの場合，仕事柄独身であることが求められ，男性と知り合う機会も殆どなく，結婚の可能性は限られていた[21]。『ジェーン・エア』や『虚栄の市』に見られるような上昇婚は，フィクションの世界だけのことであった。フローラのガヴァネスが40歳であった (101) ことを考えれば，彼女の焦りは理解できるのである。ガヴァネスになること自体，結婚して子供を生み，家庭を守るというジェンダーの役割を果たせないことを意味したのである。この点に関してヒューズは，家族から離れて保護されずに外の世界で働くガヴァネスは娼婦と同一視され，「お上品さ」の状態から墜ちたという点で，「墜ちた女」とも結びつけられたと指摘している[22]。ヴィクトリア朝の女性は「妻」と「娼婦」という二つの階級に区分されていたが[23]，ガヴァネスは未来の「家庭の天使」の育成に携わりながらも，自らは皮肉にも後者のカテゴリーに属すると考えられていたのである。川本氏はガヴァネスを「結婚を待つ女」と捉えているが[24]，外の世界で働きながらも多くのガヴァネスは自立を求めて自ら働きだしたのではないから，その内面は他の女性達と同じように，ヴィクトリア朝文化の女性観に支配されていた。フローラのガヴァネスは，このような閉塞的状況の中で恐るべき

陰謀を企んだと言えるのである。

更に，フローラのガヴァネスがこのような行為に及んだもう一つの原因として，ガヴァネスの仕事の給与面における待遇の悪さとその地位の不安定さという現実の問題が考えられる。ガヴァネスの報酬は教える科目によって幅があったが，ヴィクトリア朝時代を通じて年収50ポンド前後であったという[25]。この額は従僕や女中頭よりも多いとはいえ，男性の通いの教師よりも少ない額である[26]。当時リスペクタブルに暮らす為には年に200ポンドが必要であったと言われるが[27]，中・上流の家庭に住み込むガヴァネスは，全ての点においてレディらしく生活しなければならなかったから，貯蓄する余裕は全くなかったことが容易に想像される。しかも，ガヴァネスの採用条件は25歳から30歳位が理想的とされ，それ以上の年齢になると職を見つけるのは難しかったという。当時の男性が携わっていた専門職と違い，一般にガヴァネスが40歳を過ぎて働くことはなく，中年になると他の召し使いと同じように報酬は落ちたのである[28]。又在職中でも，供給が需要を上回る中，宗教的習慣の違いなど十分な理由もなく突然解雇されることもあったという[29]。しかも，ガヴァネスの退職後の生活は，全く保障されていなかったのである。

このように，ヴィクトリア朝のガヴァネスが置かれていた精神的・経済的状況を考え合わせると[30]，フローラのガヴァネスの一見理解に苦しむ異様な言動は是認できなくとも，理解はできるのである。父の保護から夫の保護へという，予定されていた人生のレールが何らかの理由で変更された時，女性が経済的にも精神的にも自立することが許されない家父長制社会の中で，言わば「他者」であったガヴァネスは，黙従するか，あるいは「狂女」のように叫ぶしかなかったのだろう。ショウォルターは『心を病む女たち』において，「狂気」を女性の病いと見なす19世紀的な考えに対し，家父朝的伝統の中で女性を型に閉じ込めようとする所から生じた，社会的状況の産物であることを論じている[31]。メデューサのような形相で罵るフローラのガヴァネスの怒りに満ちた叫びは，男女の二分化された見方に基

づく，理想化された女性観を強調し，性を抑圧する文化の犠牲者の自暴自棄的な叫びと言えるのである。

III

これまで見たように，語り手兼登場人物であるマーロウというフィルターを通してのフローラのガヴァネスの人物像は，ヴィクトリア朝のガヴァネスが置かれていた現実の状況を驚くほど正確に反映しているが，作者は彼女を最終的にはどのように判断し，読者に伝えようとしているのだろうか。最後にこの点について，マーロウの幾つかの言葉を通して考えてみたい。

確かに，ド・バレル邸を去る直前のフローラのガヴァネスの描写は残酷であり，ド・バレル家の財産を狙う彼女の陰謀にまつわる場面の描写は悪漢的である。しかしながら，マーロウは部分的には彼女を擁護していると取れるような言及を幾つかしているのである。例えば，この点に関して興味深いのは，マーロウがファイン夫人をガヴァネスに何度か喩えていることである。マーロウは家庭内におけるファイン夫人の様子を，次のように描写している。

> Mrs. Fyne smiled *mechanically* (she had splendid teeth) while distributing tea and bread and butter. A something which was not coldness, not yet indifference, but a sort of peculiar self-possession gave her the appearance of a very trustworthy, very capable and excellent governess; as if Fyne were a widower and the children not her own, but only entrusted to her calm, efficient, *unemotional* care. One expected her to address Fyne as Mr. (41-2, 斜体筆者)

ここでマーロウは，フェミニスト・ファイン夫人の家庭内における落ち着

いた態度を，いささかユーモラスに有能なガヴァネスのそれに喩えているのだが，“mechanically”や“unemotional”といった修飾の言葉は，雇用者にも教え子にも真の愛情を持って接することのできないガヴァネスの一般的状況を暗示している。フローラのガヴァネスは最初からフローラを好きになれず，苦境の中で恐ろしい陰謀を企んだのであるが，マーロウのこのような言葉は，彼女の残酷な行為に対する評価を幾分和らげる働きをしているように思われる。

更にマーロウは，ド・バレル氏破産のニュースを知った後のフローラのガヴァネスについて，彼女の内面を推し測りながら，次のような幾分同情し共感する感懐も述べている。

> Do you look upon governesses as creatures above suspicion or necessarily of moral perfection? I suppose their hearts would not stand looking into much better than other people's. Why shouldn't a governess have passions, all the passions, even that of libertinage, and even ungovernable passions; ... (103)

ここで注目に値するのは，マーロウがフローラのガヴァネスのセクシュアリティについて言及していることである。ガヴァネスは道徳的模範を示す立場にありながらも，家族や付き添い婦人に守られていないという点では，道徳的に自由な面もあった。しかしながら，情夫を作り，ド・バラル家の財産乗っ取りを企んだ彼女について，ガヴァネスも我々と同じ人間だと言うことによって，マーロウは彼女の情欲を認め，歪んだ人間性について理解を示しているのである。1880年，90年代になっていわゆる「新しい女」と呼ばれる女性達が登場すると，「家庭の天使」のイデオロギーは次第に機能しなくなるが[32]，マーロウの見方は，こうしたヴィクトリア朝末期の雰囲気を反映しているように思われる。

ヒロインを傷つける役として設定されているフローラのガヴァネスは，

全体としては悪役として描かれている。しかしながらマーロウは，同時にガヴァネスの置かれた「苦境」について述べ，その動機についても読者に情報を提供している。そして最終的には，フローラのガヴァネスの行ないについて理解を示す言葉を述べている。ここに見られるマーロウの女性観は，女性を性欲の全くない，道徳的に優れた存在として理想化するピューリタン的ヴィクトリア朝の女性観には囚われない，進歩的で人間的なものである。このようなマーロウの洞察力のある語りに注意深く耳を傾ける時，脇役としてのフローラのガヴァネスは，悪役としての扁平人物の印象から抜け出し，悩みと苦しみを抱えた人物として，幾分丸みを帯びた円球人物（flat character）へと変貌するのである。

コンラッドの女性人物は，これまでしばしば類型的だとか，内面が描かれていないと言われてきた。しかしながら，作品を良く読んでみると，きちんと人物造型がなされていて，その人物像は多彩であり，しかも時代の雰囲気を伝える女性像が多い。『チャンス』におけるフローラのガヴァネスも，その一人であると言える。彼女は一見悪役の扁平人物に見えるが，その常軌を逸した行動は，ガヴァネスという職業そのものに内在する矛盾と時代の文化的状況から生じたものである。多くのヴィクトリア朝のガヴァネスは，家庭内における女子教育という仕事に携わりながらも，劣悪な環境の下で時代の女性観に縛られながら，職業者としての意識を十分に持たずに教育という仕事に携わり，本領を発揮することもないまま悲惨な生涯を送ったのである。ガヴァネスの存在は，レディが働くという点において当時話題になったが，作者はこのヴィクトリア朝的道具立てを，ヒロインに自己不信の念を植えつける重要な人物として設定し，その異常な行動の動機についても書き込みながら，うまく使いこなしている。

ヴィクトリア朝のガヴァネスについて何の知識もない現代の読者が，この作品を一読した時のフローラのガヴァネスの印象は，単なる悪役として

の印象しか残らないかもしれない。しかしながら，注意深い読者は彼女の一見残酷な行動の動機に気がつき，理解を示すだろう。フローラのガヴァネスの人物像は，彼女の内面の苦悩と葛藤を詳細に描く所までは至っていないが，マーロウのコメントはその行動の動機を察する所まで我々を導いてくれる。そして作者と同時代の読者，すなわち20世紀初頭の読者は，当時雑誌や小説で話題になっていた職業柄の人物像を十分に理解し，おそらくその描写を楽しみながら読んだのではないだろうか。ガヴァネスを中心とした〈余った女〉の苦境を取り除きたいという衝動が，19世紀後半の中産階級の女性の教育，雇用問題の改善への触媒となり，フェミニズム運動の展開にもつながっていったのである[33]。『チャンス』が書かれた20世紀初頭は，女性の参政権を求める運動が激化した時期でもあった[34]。脇役にガヴァネスという職業柄の人物を用いたことには，読者，特に女性読者との共通の話題を作り出そうとする作者の意識が窺われる。『チャンス』は複雑な語りの構造を持ちながらも，初めて商業的に成功した，言わば多くの読者に受け入れられた作品である。その大きな要因は，女主人公を作品の中心に据えたことにあると思われるが[35]，脇役の人物像にも，読者との接点を作り出そうとする作者の意識と努力が表われていると言える。フローラのガヴァネスの人物像は，作者のミソジニィの反映ではなく，読者を獲得しようとする意図の産物なのである。

（本稿は，1997年10月25日，26日に熊本学園大学で行なわれた第50回日本英文学会九州支部大会での発表に基づいている。）

註

1）E. M. Forster, *Aspects of the Novel* (Penguin Books, 1977) 73–81.

2）Thomas Moser, *Joseph Conrad: Achievement and Decline* (Harvard UP, 1957); Bernard C. Meyer, *Joseph Conrad: A Psychoanalytic Biography* (Princeton UP, 1967).

3）Kathryn Hughes, *The Victorian Governess* (London: The

Hambledon Press, 1993) 185.

4) コンラッドの小説は前期に傑作が集中している為，後期小説に属する『チャンス』を余り評価しない研究者もいる。『チャンス』は評価の分かれる作品であるが，これまでの研究は十分ではなく，特に脇役であるフローラのガヴァネスについての研究は，以下のカールの批評以外には，筆者は目にしたことがない。カールは悪役としての彼女の人物描写を賞賛している。Cf. Richard Curle, *Joseph Conrad and His Characters: A Study of Six Novels* (London: Heinemann, 1957) 187–91.

5)『チャンス』は1912年に発表されたが，構想されたのは1905年頃であり，舞台設定はヴィクトリア朝末期と考えられる。一時代の文化は時代の区切りによって突然変わるものではなく，ヴィクトリア朝文化は20世紀初頭になっても残っていたようである。Cf. Frederick R. Karl & Lawrence Davies (eds.), *The Collected Letters of Joseph Conrad* (Cambridge UP, 1988), Vol. III, 228; Karl Beckson, *London in the 1890s: A Cultural History* (London: W. W. Norton & Company, 1992) 158.

6) 語り手マーロウは彼女の名前を忘れたと何度か言っているが，甥と称する青年から "Eliza" と呼ばれる場面がある。Joseph Conrad, *Chance* (Oxford UP, 1990) 122. 以下，本書からの引用は引用の都度括弧内に頁数のみで記す。

7) Joan Perkin, *Victorian Women* (London: John Murray, 1994) 153. パーキンによると，1851年の国勢調査では女性人口が男性人口を約50万人上回っていたが，1911年には約150万人上回っていたという。

8) 長島伸一『世紀末までの大英帝国——近代イギリス社会生活史素描』(法政大学出版局，1988年) 255–6. 適齢期の中産階級の女性達が結婚相手に恵まれず，容易に雇用口を見つけることもできなかったことは，一つの社会問題にまでなった。中産階級の女性が金銭の為に働くことは，恥辱であると考えられていたから，ガヴァネスがほとんど唯一の彼女達の職業であった。

9) Hughes 48.

10) Ibid. 140.

11) Ibid. 21.

12) Ibid. 95–6.

13) Ex. Jocelyn Baines, *Joseph Conrad: A Critical Biography* (Westport: Greenwood Press, 1975) 385. 特に否定的評価をしないまでも，分析対象として取り上げていない語りについての研究書もある。

14) Cf. Mildred M. Bozman (ed.), *Tennyson's Poems* (London: Everyman's Library, 1965) 194–267; John M. Golby (ed.), *Culture*

and Society in Britain 1850–1890 (Oxford UP, 1991) 118–22.

15) L. C. B. シーマン『ヴィクトリア朝のロンドン』(創元社, 1992年) 149. ロンドンにはおよそ18,000人の娼婦がいたとされ, 売春婦に費やされた一年間の総額は800万ポンドと推定されている。これに対し, 夫以外の男性と一度でも性的関係を持った女性は娼婦と見なされた。度会好一『ヴィクトリア朝の性と結婚』(中公新書, 1997年) 95–109.

16) Bram Dijkstra, *Idols of Perversity: Fantasies of Feminine Evil in Fin-de-Siècle Culture* (Oxford UP, 1988) 3–24. 松村昌家(編)『英国文化の世紀』第3巻(研究社, 1996年) 77–81. 川本静子氏は, 第3章「清く正しく優しく——手引書の中の〈家庭の天使〉像」において, 性の手引書『アリストテレス著作集』の読まれ方を分析しながら, 17, 18世紀に較べて19世紀中期になると, 女性のセクシュアリティを否定する方向に変化していることを指摘している。

17) 川本静子 同上書 62–6. 川本氏はヴィクトリア朝に流布していた9冊の女性の為の手引書を分析しながら, これらの書が女性の本質や使命に関する文化的規範を刷り込んでいったこと, すなわち「家庭の天使」とは, イギリス産業資本がその支配権確立の一環として制度化した「理想の女性」であることを指摘している。

18) Cf. Cynthia Eagle Russett, *Sexual Science: The Victorian Construction of Womanhood* (Harvard UP, 1993).

19) Robin Gilmour, *The Victoian Period: The Intellectual and Cultural Context of English Literature 1830–1890* (London: Longman,1993) 194. このような状況はエドワード朝になっても変わらなかった。Cf. Paul Thompson, *The Edwardians: The Remaking of British Society* (London: Routledge, 1992) 61.

20) Hughes 117; Perkin 153.

21) Hughes 139.

22) Ibid. 119–20.

23) 松村昌家(編)『英国文化の世紀』第4巻(研究社, 1996年) 167–70. 荻野美穂氏は第8章「『墜ちた女たち』——虚構と実像」において, 娼婦の定義は曖昧であり,「リスペクタブルな女らしい女性のイメージにあてはまらない行動をとったり, そうした性質を持つ女性は, すべて「娼婦」, すなわち性的に堕落した女として分類される可能性があったと指摘している。更に, ダブル・スタンダードの程度がはなはだしい社会ほど, 一方で強調される女性の貞淑さと男性への従属性とのバランスをとる為に, もう一方で売春行為とそれを行なう女たちを必要とする社会であると述べている。

24) 川本静子『ガヴァネス(女家庭教師)』(中公新書, 1994年) 180–2.

25) Hughes 182.

26) Perkin 166. パーキンによると，男性の事務員の半数以上が100ポンド以上の報酬であったという。

27) Hughes 159.

28) Ibid. 160.

29) Ibid. 169.

30) Cf. Mary L. Shanley, *Feminism, Marriage, and the Law in Victorian England* (Princeton UP, 1993).

31) ショウォルターはフェミニストの立場から，19世紀英国の精神医学史に対し，狂気の歴史に欠落しているジェンダー分析を行なうことによってこのことを主張している。フローラのガヴァネスの怒りは，同時に『屋根裏の狂女』をも思い出させる。サンドラ・ギルバートとスーザン・グーバーはシャーロット・ブロンテ論において，ロチェスター氏の秘密の妻バーサをジェーンの「飢餓，反逆，憤怒」を表わす分身であることを主張している。この書において，19世紀の女性作家の作品に見られる「狂女」は，家父長制の伝統に対する作家の怒りの象徴的な表象であることが論じられているが，ジェーンと作者ブロンテ自身がガヴァネスをしていたことを考えると興味深い。筆者はジェーンの抱える問題は，その気性と同時にガヴァネスの地位の曖昧さにも原因をたどることができると指摘している。Cf. Elaine Showalter, *The Female Malady: Women, Madness, and English Culture, 1830–1980* (Penguin Books, 1987); Sandra Gilbert and Susan Gubar, *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination* (Yale UP, 1979) 336–71.

32) Cf. Elaine Showalter, *Sexual Anarchy: Gender and Culture at the Fin de Siècle* (Penguin Books, 1991).

33) Hughes xvi.

34) Asa Briggs, *A Social History of England* (Penguin Books, 1991) 276; Beckson 154–8.

35) 拙論「コンラッドとニュー・ウーマン・フィクション――『チャンス』をめぐって」(弘前学院大学・短期大学『紀要』，第29号，1993年) を参照。